

特集「産学連携論文」・「社会人学生論文」の編集にあたって

鯨坂恒夫[†] 石田 亨^{††} 竹林洋一^{†††}

本特集は論文誌編集委員会（特集企画WG）の独自企画による特集として初めての事例である。研究会等の提案になる特定専門領域を対象とするものではなく、産学連携ないし社会人学生という、研究遂行の形態や属性で対象を絞った試みである。それぞれの提案趣旨概要は次のとおりである。

産学連携論文特集：

大学と産業界、大学と地域社会との連携の重要性が認識され、様々な産学連携プロジェクトが進められているが、産学の置かれた立場の違いに対する認識不足などにより、せっかくの機会を生かせないことも多い。そこで本特集により、産学連携による研究の成功例を集め、その活性化に寄与するとともに、方法論として産学連携自体の研究をも対象としたい。論文の採録条件は、従来の研究評価に加えて産学連携の機会がどのように有効に生かされているかを重視する。たとえば、産学のどのような特質が組み合わされ成功に導いたかを評価する。

社会人学生論文特集：

社会人学生（とくに博士学位取得をめざす学生）は、社会や企業におけるニーズを体験をもって理解したうえで、大学等の持つ技術的シーズをうまくマッチさせる可能性を持ち、学界のみならず産業界や中央・地方政府等において先導的・中核的役割を果たしうが、わが国ではまだその重要性が十分認識されておらず、量的に満足できるには至っていない。そこで本特集により、社会人学生の関与する研究ないし技術開発の成功例を集め、わが国の社会人博士をいっそうプロモートすることをねらうものである。論文の採録条件は、従来の研究評価に加えて、上述のニーズとシーズのマッチングなど、社会人学生という機会がいかにも有効に生かされているかを考慮する。

産学連携・社会人学生特集論文の応募件数は48件、審査件数は35件、採録は15件、不採録は20件、採択率は42.9%であった。本特集の論文応募状況は予想を超えて良好であった。社会と情報処理の接点で多くの投稿が得られたことは、本特集へのニーズの大きさを

示している。

ただ、社会人学生論文特集の方は、いくつかの分析すべき状況が認められた。まず、一般論文へ変更することになったものが投稿の1/3以上あった。産学連携論文特集の付加的条件は、論文の内容に反映されやすいので、投稿する側にとっても審査する側にとっても、比較的判断が容易である。それに対して社会人学生論文特集は企画趣旨の理解を十分得られていないことが危惧された。一般論文にない付加的な採録条件を先述のとおり明示し、「はじめに」や「おわりに」でそのことを説明するよう求めたことが守られなかったことにより、案内に明示したとおり、対象外とされた論文については著者への問合せを行ったうえで一般論文として受け付けるという処置をとった。

特集企画WGは本特集を3年程度にわたって継続したいと考えている。来年度以降は今回の経験を踏まえ、産学連携論文特集に一本化し、その募集告示において社会人学生の投稿を奨励するという方法を考えている。

「産学連携論文」特集編集委員会

- 編集長
鯨坂恒夫（和歌山大）
石田 亨（京大）

「社会人学生論文」特集編集委員会

- 編集長
竹林洋一（静岡大）
- 編集委員 [敬称略、順不同、重複を含む]
中渡瀬秀一（NTT）、黒橋禎夫（東大）、加納 健（NEC）、安本慶一（奈良先端大）、樋地正浩（日立東日本）、宮田高志（産総研）、寺田松昭（農工大）、寺田真敏（日立）、松浦幹太（東大）、青山幹雄（南山大）、平田圭二（NTT）、葛岡英明（筑波大）、落水浩一郎（北陸先端大）、岸 知二（北陸先端大）、樋山淳雄（東京学芸大）、海谷治彦（信州大）、市瀬龍太郎（NII）、大野健彦（NTT）、植村俊亮（奈良先端大）

[†] 和歌山大学システム工学部デザイン情報学科

^{††} 京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻

^{†††} 静岡大学情報学部情報学科